

御室焼の水指研究

—金森宗和の茶席における、御室焼水指の役割をめぐって—

宮川 菜々子

(愛知県陶磁美術館 学芸員)

はじめに

水指は特別な水をいれる容器である。特別な水とは茶事において、道具を清める、あるいはお茶を点てるのに用いられる、言うなれば新しい水である。茶会において主客の手の中を取り回される、茶碗や懐石器に対して、水指はほぼじっと佇んでいる、とりわけ静的な道具であると言えよう。

御室窯は洛北、御室仁和寺門前に正保4（1647）年頃開窯したとされる。野々村仁清（生没年不詳）が率いた御室窯では、専ら茶の湯で用いられるやきものが焼かれた。茶人、金森宗和（1584-1656、以下、宗和）の指導のもと製作された茶入や茶碗の中には、従来の製品とは異なる斬新な形や絵付けのほどこされた作品が多くある。また、御室焼水指には、この期の堂上趣味を反映したとされる特異な形状や、公武の貴人が求めたとされる色絵金銀彩の作品などがある。

筆者はこれまで、文献内に登場する御室焼を年表化してきた。現在はこれに、伝世品、作品画像、御室窯跡出土陶片などを調査した結果を加え、それらの総合的な分析に取り組んでいる。本稿では宗和の茶会記をもとに、水指がどのような組み合わせの中で用いられたのかをみてゆく。宗和の茶会記をめくってゆくと、名記されているわけではないが、その道具組みには、主題性（テーマ）や連続性（パターン）が見え隠れする。

本稿で筆者は、水指が茶会全体の帯びている主題性にどのように貢献しているのか、どのような法則のもと組まれているのかを考えたい。その方法として、1、文献上に登場する御室焼水指をまとめた「水指年表」を概観する。ついで、2、宗和の茶会記の中から、「篠葉」、「嶋物」、「竹のふし」、「はたか」、「青葉」、「黒くすり」の6項目に分析を加える。

1. 御室窯、水指年表

末尾に付した「水指年表」については、主に岡佳子氏の論考を参考にした（註1）。

御室窯で焼かれた水指の初出は、慶安2（1649）年の『隔莫記』（以下、「隔」）に見られる——10月13日、木下利当（淡路守、1603-1662）より、同年8月24日に登場した皿と水指が鳳林承章（鹿苑寺住持、1593-1668）のもとへ届いたという記事である。ただし水

指の形状や釉調に関する記述はない。開窯から3年ほどと間もない頃から、水指が生産されていることが分かる。

慶安3(1650)年には、『宗和茶湯書』(以下、「湯」)に「御室焼ねちぬき所々ニ篠葉ふた手がかり有」とある。形状の特徴を示す「ねちぬき」とは、筒形の水指のボディにらせん状に溝が象られるものである。「ふた」と、「手がかり」すなわち把手をともなうことがわかる。所々に篠の絵付けがほどこされた水指である。

翌年以降登場するものに「嶋物手御室いもかしら」がある(「湯」、慶安4(1651)年)。「嶋物手」は、渡来物写しの意だが、主に素焼きの陶器を示す語として捉えられるだろう。仁清印を伴う素焼きの芋頭水指は、実際に伝世している(註2)。外側面は無釉であり、縦長の球体を呈すボディには螺旋状にヘラ削りがめぐらされる作品である。内側面には白濁釉が施釉されている。

ほかにも施釉の有無やその特徴だけ表した、「かき薬」、「はたか」、「青薬」、「薬かけ」、「ひしのもん」、「薬はけ」、「白くすり」、「石はせ」、「黒くすり」などがあり、いずれも宗和在世期間にみられる。色絵を表す「赤色」は、宗和没後の寛文5(1665)年にみられる。釉薬の特徴は、いずれも伝世品に見いだされる御室焼の釉薬の特徴と同じである。

形状の特徴が記されたものには「はすの葉成」、「竹のふし」、「せいの高さ」、「竹輪」、「上下きくさきみあり」、「ひつみ」、「いひつ」が宗和期にみられる。没後には「ひょうたん」や「たらい」、「ゆがみ口」があらわれる。形状について言えば、「せいの高さ」(註3)や「ひょうたん」(註4)に対応する伝世作品は複数考えられるが、そのほかの形状に適する作例は管見の限り見いだせない。

2. 金森宗和の道具組について

①「御室焼ねちぬき所々ニ篠葉ふた手がかり有」

慶安3(1650)年5月15日昼の茶会で用いられている。この茶会では、「糸目鑲付篠葉風炉」が登場することからも「篠葉」がキーワードとなる可能性が高い。端午の節句では篠の葉饅頭を食べると言うが、これが関係しているのかもしれない。

その他に本会で用いられたのは、床飾りに「一休横物」、棚飾りに「桑絵の火箸」と「染付の丸き香合」、「古竹」の蓋置、「長きふくへ」の炭取がみられる。中立の後に書院についての記述があり、床に「うるみの四角成薄板」が敷かれ「花入さはり」が飾られる。「菊一輪、口ゆり二りん」が活けられている。下棚に「羽ほうき」と先の「蓋置古竹ふしなし」が置かれ、問題の水指の前には茶入「御室焼かきの薬かけ丸」が置かれる。また、茶碗「こきて」(呉器手)と水こぼし(建水)「御室焼盃の臺のやうなり」と御室焼が組まれている。

これらの道具の中でも特に茶入は、水指の前に置いたという旨を明記しており、ある意味では水指と意識的に置合せられたといえる。本席で用いられたのは「かき薬」の御室焼丸茶入とある。水指の「篠葉」が銕絵であると確定はできないが、茶入の「かき薬」との調和を考えると可能性として考慮すべきだろう。さらに、先端の尖った細い篠の葉の形に

対し、ふっくらとした丸い茶入の形態を置くことで、バランスを取っているようである。ここでもやはり、「篠葉」の模様を主軸に他の道具を組み合わせたとも、とらえられないだろうか。

さて、御室焼と明記されていないものの、「篠の葉」の絵付け水指は、慶安5（1652）年2月14日にも扱われる。先述した5月の会とは違い、会席のはじまる前に出されていることや、その他の棚かざりに「はまくりのからはこ」、「ほうろくおむろ」、「かた口」などがみられることが異なる。中立後、書院には備前の花入が飾られ、御室焼の高麗写しが用いられている。先の茶会では書院飾りに金属や漆と言った格調の高い素材が用いられていたのに対して、この会では土でできたものが主だっている点が異なる。「はまくり」からは、夫婦良縁や上巳の節句などが想定でき、故に「篠の葉」の意味合いが5月の会とは異なっている可能性が高い。宗和の茶会は御室焼を斡旋するためのデモンストレーションの役割を兼ねていたことを考慮するならば、2月中旬に上身の会の取り合わせを提案していたとも考えられないだろうか。大胆な解釈であることを恐れずに言えば、5月の会は男性性を2月の会は上巳の節句間近であることから女性性を演出している会とは言えまいか。

②「嶋物手御室いもかしら」

慶安4（1651）年6月4日朝の茶会で用いられている「嶋物手御室いもかしら」は、会席後に登場する。この時に「から物」の茶入が水指と置合せてあることから、渡来のものであるという連続性が生じている。花入には、かねの物が用いられるが、茶碗と建水は御室焼に統一されている。またこの日は、「今日土用入」とあることから、一年のうちでも最も暑さが厳しい「夏の土用」とわかる。無釉のいもかしら水指は岩清水を想起し、かねの花入もひんやりとした触感をたたえている。渡来の道具を用いて、海の向こうにある遠い世界へと思いをはせることで、目の暑さを凌いだのかもしれない。

③「水次御室竹のふし」

承応2（1653）年3月晦日、8月19日昼、9月19日朝、明暦元（1655）年8月14日朝の計4回の茶席で用いられた記録が確認できる。

竹の節の形状をした水指は、伝世品にはみられない。単色施釉であるのか、あるいは無釉であるのかは不明だが、9月19日の条には「御室竹のふしはたかやき」という記述がみられる。

また、4席を見渡すと、いずれも竹節水指があらわれるのは会の冒頭部分であった。会席、中立の後に登場する水指は御室焼の場合がほとんどだが、かならずしも同じ竹節のものという記述はない。これらが用いられた季節は3月、8月、9月とあるように不揃いであり、春でも秋でも用いられていることになるため、季節に関連する要素はないといえるだろう。

竹節水指が会の冒頭に現れることに何かしらの意味があると考えられる。例えば、①薄茶の点前に限定した使用であった、②棚かざりとして使うのが主な用途であった、③他の道

具と喧嘩しないので引き立て役的に用いられた、④竹節が物事のはじまりを暗示する役割を帯びていたなどいくらでも考えることができるが、連続性の背景に関する追求は今後の課題へ期したい。

なお、茶席ではほかにも茶杓や茶筌、柄杓といった竹製品が用いられる。竹節形の水指は、そういった意味では、ほかの道具との調和性がかなり高いため、季節を選ばないオールマイティな道具として重宝された可能性も高いだろう。

④はたか手くるく（くるす）

承応3（1654）年3月から10月にかけて、計6回の使用が記録に残る水指である。「はたか」とは無釉を意味し、これらの形状は不明である。

先述の③竹節水指が茶会の冒頭に置かれるのに対し、はたか手くるく（くるす）のものは中立の後に登場する確率が高い。また水指の前に置かれる茶入は、6回の茶会で少なくとも5回は和ものであることも共通している。3月17日朝は、「前に御室の長」とあり、御室焼の細長茶入と思われる（註5）。3月2日は、「水指の脇に面取り・茶葉の茶入と、染付茶碗を置合せ、濃茶一服」とある。『松屋会記』（正保3（1649）年3月25日）に登場した御室焼の「トウ四方」茶入に類するものであろう（註6）。さらに、5月9日には、「瀬戸ふかく黒」とあり、瀬戸製の茶入を置合せている。6月4日には、「水指前に御室茶くすり茶入置合」とあり、御室焼の茶入が組まれている。10月10日だけは、「茶入薄金色」とあるが色のみの記述であることから、唐物である可能性も払拭できない。

なお、くるく（くるす）の意味が仮に十字形であるとしたならば、出光美術館所蔵の十字鈕付蓋をとまなう水指のような作品が適するだろう（註4）。現在では信楽写しと呼称されているように、和もの水指をアレンジした仁清オリジナルの形をした水指である。②「嶋物」を用いた渡来ものを組み合わせた席があることに対して、和ものを組み合わせる席があったとしても、さしておかしくはないだろう。

⑤「青葉」と⑥「黒くすり」

「青葉」の水指という一見、織部釉のそれを想起するが、伝世する御室焼水指には織部釉のものはない。むしろ、瀬戸でみられるような鶯色の緑釉を流し掛けした、双耳筒型のものが複数伝来している（註8）。

茶会記に「青葉」が登場するのは、承応3（1654）年12月8日朝、承応4（1655）年6月16日朝、6月19日、7月20日朝、7月21日昼、8月21日、8月24日、明暦元（1655）年9月6日朝、の計8回である。対して、「黒くすり」の水指は、承応4（1655）年11月5日と明暦元（1655）年12月16日の2度、記録が確認できる。「青葉」は、12月、6月、7月、8月に用いられており、晩夏から秋、そして冬の使用が記録されているが、中でも6月から8月は使用回数が多い。一方「黒くすり」は、11月と12月に用いられた。なお、記録の上では使用頻度が黒よりも青の方がまさる。より汎用

性が高い色であったことが指摘できるだろうか。

「黒くすり」の用いられた場合をみると、「茶入せとくすり切肩衡水指御室筒なり黒くすりぬりふた」（11月条）と「水指御室黒くすり筒なりぬりふた茶入れ茶」とあるように、筒形であることが分かる。伝世する水指で「青葉」といえるものはいずれも双耳をともなう筒型のものであり、形の上では類似しているといえよう。

茶入との置合せについては、「青葉」の用いられた8日間のうち、6月16日、6月19日、9月6日に同じ茶入が組まれていることがわかる。表記は一致しないが、「ちゃ入しりふくらのから物」、「茶入から物しりふくら朱丸盆にのる」、「から物茶入丸さほ」はいずれも唐物の尻膨形の茶入を示していると思われる。1つの連続性としてとらえることができるだろう。水指の筒形と茶入の尻膨形を取り合わせると、前者は高い位置、後者は低い位置にそれぞれの重心がありバランスが考えられていることがわかる。

一方、「黒くすり」と置合せられた茶入については、瀬戸製ということ、そして茶色いこと以外に詳細はわからない。しかし、視線を転ずると、黒くすり水指の場合には、竹花入が床かざりに用いられている。同水指には塗蓋がのせられているが、漆黒と竹花入の自然な竹の木肌が対比される。黒いボディに漆黒の蓋を冠する水指は、茶室の中でもそれなりに存在感が大きい、差し色的なものであったと考えられる。別の席で同じ道具組が用いられており、やはりこの場合も1つの連続性といえるだろうか。

結び

本稿では主に、水指に用いられた模様（籐葉）、形（嶋物いもかしら、竹節）、釉薬（はたか、青葉、黒くすり）に着目し、宗和の茶席における道具組とテーマとの関係性、そしてそのパターンを掘り下げてきた。中には重複する項目もあるが、まとめてゆく。

模様については季節によって柔軟に意味合いを持たせて使っていた。形は、ほかの道具組との関係の中で茶会のテーマを唐物趣味へと彩る効果のあるものがあつた。あるいは、茶会の冒頭に用いられるパターンなど、ある一定の使用方法があるように思われた。釉薬について、「はたか手くるく（くるす）」のものは和物茶入と、「青葉」のものは唐物茶入と、「黒くすり」のものは竹花入と組むというような、連続性（パターン）が垣間見える。

【註釈】

註1 「『隔莫記』陶磁器年表」、『史窓』37号、史窓編集委員会（1980）28-50頁ほか

註2 〈芋頭水指〉Victoria and Albert Museum 所蔵 ほか

註3 「せいの高き」は細長水指と考えられる。

註4 〈信楽篋瓢形共蓋水指〉野村美術館所蔵 ほか

註5 〈瀬戸釉肩衡長茶入 銘存命〉野村美術館所蔵 ほか

註6 〈褐釉四方茶入〉高津古文化会館所蔵

註7 〈信楽写共蓋水指〉出光美術館蔵

註8 『原色愛蔵版日本の陶磁 第12巻 仁清 乾山』、中央公論社（1975）所載

【参考文献】

・『伊丹屋宗不筆記』、慶應義塾大学・高橋箒庵文庫、千宗左著・梅園（写）（1920）『旁求茶會記』所収

・『宗和茶湯書』、『宗和献立』、国立国会図書館・デジタルアーカイブ、『諸家会席記』所収 ほか

1656	「御室いびつ」 「御室ろくろ目」 「飯櫃水指」	湯 湯 湯
1657		
1658		
1659		
1660	「水さし御室焼」	隔
1661	「水指仁和寺焼瓢箪」	
1662		
1663		
1664		
1665	「御室焼之有耳水指 無蓋赤色也」	隔
1666		
1667		
1668	「仁清たらい水指」 隔	
1681	「仁和寺水指」	隔
1684	「仁清水指ゆがみ口」	隔
1686	「御室焼之水指」	隔

『隔莫記』⇒「隔」 「宗和茶湯書」⇒「湯」 『宗和献立』⇒「献」